

連載
20

〈へびり〉の方言

ヨーイ・ドン!
(北部児童センター駅伝大会で)

秋は運動会のシーズン。さわやかな秋空の下、小松市内のあちらこちらで応援の歓声が上がったことではしょつ。ところで、運動会と言えば「かけっこ」。小松の方言ではハシリヤンコなども言いますが、「かけっこ」などの競争で1等賞の人がいれば、一方で必ずいるのが〈へびり〉になる人。今回はその〈へびり〉の方言をご紹介します。

一つの集落にたくさんの方言形が併存

昨年までの調査結果(約80集落をもとに〈へびり〉の方言形を整理していて、多くの集落で、何種類もの方言形が使用されていることに気づきました。最低でも2、3種類。4、5種類も決して珍しくなく、津上川流域の中海のように8種類もの方言形が聞かれた集落さえあります。親しい人間関係を背景とした、比較的遠慮のいらぬ方言社会であっても、〈へびり〉のような言葉はそう公然とは使えないもの。そうした隠語的性格が、同じ集落内での個人差や、個人の中での併用につながる、このような状況を生んだのではないかと考えています。

ゲット類、ゲベ類、ゲス類が代表形

比較的新しい形と考えられるビリ(ピリを含む)、身体部位の「尻」をさす形から派生したと考えられるケツを除くと、ゲット類(ゲット・ゲットクソ)、ゲベ類(ゲベ・ゲベス・ゲベソ・ゲベスト・ゲベツ)、ゲス類(ゲス・ゲスベ・ゲスツ・ゲスツポ・

ゲスツ)が小松での代表的な方言形です。このうち、ゲット、ゲベはともに「尻」の意の方言形から、ゲスは、「下衆(下種)」の意から生じたものかと考えています。中では、ゲットが市内の最も広い範囲で聞かれ、その強調形と思われるゲットクソは津上川・鍋谷川・梯川流域と、日本海沿岸部、そして加賀市に近い南部地区に比較的最とまって分布しています。ゲベ、およびそれからの変化形と思われるゲベス、ゲベツも広い範囲で聞かれますが、ゲベツは木場潟周辺に多く分布しますが、ゲスベはまた広い範囲で聞かれますが、ゲスベは鍋谷川流域に多く分布しています。

共通語的なビリが勢力を伸ばす中、これらの方言形のうちのいくつかは、ビリとともに今後もひそかに使われ続けるのではないかという気がしています。

連載
21

〈尻〉の方言

はつけよい のこた のこた
(自江保育所で)

先月号でご紹介した〈へびり〉の方言形の中には、身体部位としての〈尻〉の方言形から派生したと思われるものがあります。今月は一九九九年最後(へびり)の月。そこで今回は、〈へびり〉とも関係の深い〈尻〉の方言を取り上げることになります。

〈尻〉と言えば、数ある身体部位の中でも比較的注目度の高いものの一つですが、場所が場所だけに、日常生活においてその呼称が公然と口にされることはあまり多くありません。主に、家族内やごく親

しい人間関係の中で語り継がれてきた言葉と言えましょう。

ヒチベタからケツ、ケツベタ(ケツベ)、そしてシリへ

小松市内での〈尻〉の方言形の分布を見ると、大日川上流部の丸山、大杉谷川上流部の大杉本町、津上川上流部の中ノ峠といった山間部や、市内に点々と聞かれるヒチベタ(シチベタ、シチビタ、ヒチビタ)が最も古い形と考えられます。シリベタがシチベタ、そしてヒチベタへと形を変えたものでしょう。辰口町に近い上八里や古府では、ヒチベタのヒチを数の「七」になぞらえた「ヒチベタ ハチベタ クラフシヤ トンデク(子どもの尻をたたけば飛んで逃げて行く)」といった言い方も聞かれました。また、河田館・観音下・金平・本江・津波倉など、所々でヒチベタが「尻」から「尻」の下の「太股」に意味をずらしているのも、この方言形の古さを物語るものとして注目されます。

ヒチベタの次に分布を広げたのは市内の広い範囲で聞かれるケツでしょう。

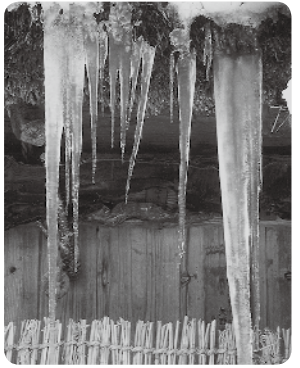
そして、ケツはヒチベタと混交して市内のあちこちでケツベタという方言形を生み、さらにはその下略形ケツベ(梯川流域ではケツビ)を生んだと考えられます。そしてさらに今、高年齢世代にも共通語形シリ(オシリ)が使われ始めたのです。

北の鍋谷川・梯川流域にアカベの分布

これまで紹介した〈尻〉の方言形が市内の広い範囲に分布するのに対し、北の鍋谷川・梯川流域にのみ分布の見られる方言形にアカベ(アカビも)があります。能美郡・江沼郡内にはアカベが「肛門」をさす所がありますので、本来「肛門」をさしていたものが、この地域で意味をずらして「尻」をさすようになったと考えられそうです。

連載 22

冬の生活と方言〈氷柱〉



氷柱
写真提供 辻 久詩さん(三谷町)

連載 3年目にあたり

新しい年を迎え、この連載も3年目に入ります。連載では、現在継続中の市内全域での方言調査の結果を少しずつご紹介していますが、登場する方言は主に70歳前後の皆さんがお使いの、あるいはお使いだったものです。中には、若い世代になじみのない方言も多いことと思います。最近、私の指導学生が、小松市内中心部で10歳代から70歳代までの世代別方言調査

をしてくれましたので、今年は若い世代も含めた、変化する小松の方言の状況も時にご紹介できればと思います。
屋根の垂木の先に下がるからタロキって本当？

これまでに小松市内で確認できた氷柱の代表的方言形はタルキとタロキです。中でもタロキが圧倒的に優勢で、市内の全域に分布します。タルキ・タロキの類は、小松だけでなく、福井県嶺北地方から石川県(奥能登を除く)にかけて聞かれるもので、「屋根の垂木(タルキ・タロキ)の先から下がるのでタルキ・タロキと言つ」と考えている人が多いようです。しかしこれは、福井・石川の人が勝手に作り上げた民間語源と呼ばれるものなのです。

タルキ・タロキは古語「垂氷」が変化したもの

実は、小松の代表形タロキはタルキから変化したもので、タルキはさらにタルヒという形にさかのぼります。タルヒとは『源氏物語』(未摘花)に「朝日さす軒のた

るひは解けながら」のように登場する古語「垂氷」です。文字を持たない方言として京都から北陸に伝わる間に、タルヒの語源がわからなくなり、先の民間語源によりタルキ、そしてタロキへと形を変えていったのです。

ほかに、タルキ・タロキを方言形の一部に含んだタンタルキ(丸山・下大杉・本江)、タンタンタルキ(観音下・松岡・上り江)、タンタンタルキ(波佐谷)、チンチンタルキ(中ノ峠)／タルキンポー(壇田・本折)、タルキンポー(沖町・園町・寺町・龍助町)、タロキンポー(本折)、タロキンポー(白江)／シンジンタルキ(軽海・日末)、シンジンタロキ(日末)、センダンタロキ(安宅)といった形も聞かれました。方言の自由で豊かな創造の世界を感じさせるものばかりです。

連載 23

冬の生活と方言〈雪に足がはまる〉



長ぐつが雪にうつって
歩けなかった日があったしい…。
北陸の冬の日も期間が短くなりましたねえ

近年の暖冬傾向で、雪の生活とともに使われてきた方言が、少しずつ使われなくなってきたように思います。先月ご紹介した(氷柱)も、最近ほめつきり見かける機会が減りましたので、タロキ・タルキに代表される方言形を懐かしく思い出された読者も多いのではないのでしょうか。今月も、そんな雪の生活に関係の深い言葉を取り上げます。

共通語は「はまる」「もぐる」それとも？

冬、雪道を歩いていて雪に足がはまった経験のある人は多いでしょう。そんな時、皆さんは「足がどつした」と言いますか。積雪量が減り、融雪・除雪対策が進んだ最近でも、小松をはじめ北陸地方の多くでは、雪に限らず柔らかい土や泥に足がはまる場合も同じ言い方をしますので、日常まだまだよく使われる言葉だと思えます。

ところが、この共通語形は何かと違うと実ははつきりしません。「はまる」か「もぐる」かなとも思いますが、ほかの言い方もできそうです。雪がほとんど降らない東京あたりでは、まず必要とされない言葉だからでしょう。

高年層では代表形ウツルのほか、ハマル、シズム、「ゴボル

市内の高年層の人たちが使っている言い方を見ると、ハマル(矢崎・島・木場・津波倉・粟津・那谷・滝ヶ原など)とシズム(木場・津波倉・林・矢田野・二ツ梨・那谷・

菩提など)が多く聞かれた南部地区を除いて、市内の広い範囲でウツルが聞かれます。ウツルは、北の寺井町、美川町、川北町にも分布し、市内山間部の丸山・大杉・中ノ峠などでオチルやオツルが分布することから、上二段活用型の古形「落つる」が変化したものと考えられます。ほかに、「ゴボル」尾小屋・沢・本江・佐々木・浜佐美本町・矢崎・符津など)も少し聞かれました。「ゴボル」は、北は松任以北の金沢方面、南は加賀市から福井県北部(福井市以北)にかけて分布するものです。

市中心部ではウツルからハマルへ？

最近の市内中心部での世代別調査では、高年層の代表的方言形であったウツルは、40歳代以上でこそ使われているものの(10%から30%)、30歳代以下では全く使われていません。代わって増えているのがハマルとウマルでした。ウツルは、いずれ消え去る運命にあるようです。

連載
24

冬の生活と方言―再び
〈雪渡り〉の方言



寒さなんてへっちゃらだよ。
冬の自然人学校in蓮如山

3月を迎え、春の足音が少しずつ近づいてきました。暖冬とは言え、雪に象徴される北陸の冬がそろそろ終わりを告げようとしています。福井県武生市西南部の雪深い山村で生まれ育った筆者にとって、子どものころ、冬の生活の中で楽しかった思い出の一つが〈雪渡り〉でした。

こんな面白い日があったとあるでしょうか！

冬の晴れた寒い朝、降り積もった雪の

表面が凍って、普段は足がウツテ(はまって)歩けない雪の原を駆け回って遊ぶ〈雪渡り〉。宮沢賢治も、童話「雪渡り」の冒頭で「雪がすつかり凍って大理石よりも堅くなり、…(中略)こんな面白い日だ、またとあるでしょうか。いつもは歩けない黍の畑の中でも、すすきで一杯だった野原の上でも、すきな方へどこまででも行けるのです。…」と書いています。

〈雪渡り〉の方言については、この連載の3回目(98年6月号)で一度取り上げたことがあります。ここでは市内東部郷谷川、大杉谷川、湊上川流域の分布しかご紹介できませんでしたが、今回はもう一度、市内全域の〈雪渡り〉の方言を見たいと思います。

広い範囲で聞かれるソラルキとその変化形

前回ご紹介した市内東部をはじめ、北部の鍋谷川、梯川流域、さらには南部地区の一部を含んだ広い範囲に聞かれる代表的方言形はソラルキ(白い雪原を白い雲の上へ空に見立てた「空歩き」の意)

です。中でも、郷谷川流域と大杉谷川下流域には、ソラルキの頭に才を付けたオソラルキがオソラクキを経て変化したと思われるオシヨラクキ(松岡・沢・金野・上江・瀬領・波佐谷・長谷、オシヨラク(観音下)、オシヨリキ(金平)、オシラク(沢)、オシラク(尾小屋)、オシヨライコ(尾小屋・西俣・波佐羅)、オシヤリコ(大野・花坂・五国寺)などの多彩な方言形が聞かれました。

ソラルキの類以外では、ウワアルキ(湊上川流域の中ノ峠・岩淵・中海・軽海や南部の日末・島、ウワノリ(白用・馬場、ウワノボリ(菩提・滝ヶ原)のウワーを含んだ形と、シミニノル(矢田野)の分布が注目されます。

一方、旧小松町域や海岸部集落では〈雪渡り〉にあたる語形が聞けません。町部や、雪の少ない海岸部では〈雪渡り〉をすることがなかったためでしょう。生活環境や気候風土がことばの存在に影響を与えた例と言えます。

連載
25

〈おたまじゃくし〉の方言



オタマジャクシは、僕らよりずーっと早く大人になっちゃうだね。

共通語の普及と衰退に向かう方言

明治20年代以降の標準語政策に始まり、昭和30年代以降のテレビの登場で決定的となる共通語の普及は、全国各地で伝統的方言の急速な衰退を招きました。もちろん、これまで本連載で取り上げた中には、今なお方言が健在のものもありましたが、残念ながら大きな流れとして

は、若い世代を中心に、伝統的方言は明らかに衰退に向かっています。春になり、まもなく田んぼなど、あちこちで見かけるよつになる〈おたまじゃくし〉の方言もその例外ではありません。今回は、本連載の5回目(98年8月号)に〈蛙〉との関連で少し触れたことのある〈おたまじゃくし〉の方言について、あらためて見ることにします。

〈おたまじゃくし〉はギヤル〈蛙〉の子

小松市内での〈おたまじゃくし〉の方言形の分布を見ると、共通語形と同じオタマジャクシ以外に、市内北部湊上川・鍋谷川流域、東部郷谷川流域、南部日川流域を中心に、オタマジャクシを取り囲むようにギヤルノコ類が聞かれました。ギヤルノコのギヤルとは〈蛙〉のこと。つまり、ギヤルノコとは「蛙の子」の意味です。ギヤルは〈蛙〉の方言形として、小松市内でよく聞かれるギヤワズよりも古い形です。今や大杉谷川や湊上川上流部の山間の集落にしか聞かれなくなったギヤルが、〈おたまじゃくし〉の方言形としては今なお広い

範囲で聞かれました。ギヤルノコはギヤルノコ、ギヤルノコ、ギヤルゴといった形にも変化していますが、先に〈蛙〉の意のギヤルが衰退してギヤルノコのギヤルの意味が不明になった結果、さらにギヤリノ、ジャンノコ、ジャンゴ、ジャリゴ、ジャレゴといった形に変化している地域が多く見られます。旧小松町域に近い梯川下流域にはギヤロンババ(沖・本折)、ゲロンババ(土居原)、ジャロンバンバ(白江)、ジャンガリババ(打越)といったババ・バンバを含む珍しい形も聞かれました。

このほか、辰口町に近い下八里には辰口町西部や川北町に連続するボボタ、蛭川・長崎・浮柳など北の海岸部に近い地域にはオタンボ、符津・島・白山田には「高」の方言形から意味を変えたメメジャコ、メメンジャコ、加賀市に近い菩提・滝ヶ原にはコボロといった形も聞かれました。しかし、これらの多彩な〈おたまじゃくし〉の方言形も、共通語オタマジャクシに確実に取って代わられ、年配の方々の記憶からも次第に忘れ去られようとしているのです。